

## 「大統領の料理人」 ★★★

2013（平成25）年7月30日鑑

賞＜GAGA試写室＞

監督・脚本：クリスチャン・ヴァンサン

オルタンス・ラボリ（大統領のプライベート・シェフ）／カトリーヌ・フロ

ミッテラン大統領／ジャン・ドルメツソン

ダヴィッド・アズレ（エリゼ宮の官房長官）／イポリット・ジラルド

ニコラ・ボヴォワ（オルタンスの助手）／アルチュール・デュボン

ジャン＝マルク・ルシェ／ジャン＝マルク・ラトリフ

メアリー／アーリー・ジョヴァー

パスカル・ルピック（エリゼ宮の料理長）／ブライス・フルニエ

2012年・フランス映画・95分

配給／ギャガ

### ＜女性の進出は、タイプから料理へ！＞

7月25日に観た『タイピスト！（POPULAIRE）』（12年）は、1950年代におけるタイプの早打ち大会にみる、女性の社会進出を面白く描いた映画だった。それに対して本作は、1970～80年における料理の世界における女性の社会進出を描いた映画。カトリーヌ・フロが演じる本作の主人公オルタンス・ラボリは、1988年から2年間フランス大統領フランソワ・ミッテランのプライベート・シェフを務めた実在の女性料理人らしい。しかし、まずプライベート・シェフとはナニ？それにはどんな権限があり、どんな役割を果たすの？

フランスの片田舎で家庭料理を売りにした小さなレストランを経営していた彼女が、なぜ大統領のプライベート・シェフに？フランス大統領官邸＝「エリゼ宮」では、パスカル・ルピック（ブライス・フルニエ）を料理長とする膨大な数の料理人が働いていた。また、エリゼ宮の官房長官ダヴィッド・アズレ（イポリット・ジラルド）を頂点とする饗宴の指揮命令系統も明確に確立していた。その中でオルタンスはオフィシャルな料理人のチームとは別に大統領のプライベートな食事を担当するわけだが、男ばかりのシェフ社会の中に身を置いたオルタンスは、おいしい家庭料理が作れるというだけの能力で本当にやっていけるの・・・？

### ＜女シェフの奮闘ぶりが見モノだが、料理も主役！＞

オルタンスは大統領のシェフを辞めた後は、なんと南極調査隊のシェフとして南極にも赴き、さらにその後は自分が一番好きだったフォアグラ用のガチョウの飼育に適した場所を見つけるためニュージーランドで仕事を始めるなど、世界中でフランス料理や食材の普及に努めた人物らしい。本作は、そんな実在の人物がエリゼ宮に乗り込み、男ばかりが支配するシェフ社会の中で奮闘する姿と、その後の南極調査隊のシェフとしての働きぶりを同時並行的に描いていく。巨大組織には当然古くからの慣習があり、良くも悪くもそれに支配されているのは官僚組織をみれば明らかだが、本作を観ていると、エリゼ宮の料理チームもそうだということがよくわかる。食材の買い付け、その保管方法、メニューの検討と決定、会計処理等々につき多くの「先例」があるから、「先例踏襲」とすれば軋轢は生まれない。しかしオルタンスの場合は・・・？

本作ではそんなオルタンスの獅子奮迅の活躍ぶりが見どころだが、同時に本作の主役はオルタンスが作り出す見事な料理の数々。舌を噛みそうな料理の名前は私にはさっぱりわからないが、スクリーン上に登場するおいしそうな料理の数々には思わず喉がゴクリ・・・。本作のプレスシートには、ハリウッドレポーターの忠告として、「注意！この映画は、空腹のときに観てはいけません。」と書いてあったが、なるほど、なるほど・・・。

### ＜ここにも改革派と抵抗勢力の対抗の構図が・・・＞

オルタンスが大統領のプライベート・シェフに選任されたのは、ミッテラン大統領が素朴でシンプルな家庭料理を愛したためだが、その要望に応えるためには、やはりそれなりの素材が必要。したがって、大統領のプライベート・シェフに就任したオルタンスは、自分が納得できる食材を入手するため、これまでの「先例」で決まっていた食材の買い付け業者を勝手に変えたり、仕入れ価格に糸目をつけなかったりという「改革」を一人で断行。これぞ組織の枠にとられない女性パワーと、一方では感心させられたが、この改革はホントに断行できるの？

オルタンスの登場を快く思っていなかったのはパスカルを代表とする男のシェフたちだが、それ以外に経費節減の観点からもオルタンスのやり方が問題に。その結果、オルタンスがわざわざ自分の郷里まで行って最高の食材を仕入れていたことが公私混同とされ、汚職まがいの疑惑まで・・・。こりゃ、オルタンスにとってたまったものではない。オルタンスは若い助手のニコラ・ボヴォワ（アルチュール・デュボン）とのコンビでそんな抵抗勢力と闘いながら、「大統領に喜んでもらう食事を提供したい」という一念で2年間頑張っていたが、さてその結末は・・・？

### ＜大統領の健康問題と食事のあり方は・・・？＞

山本周五郎の『樅ノ木は残った』は、仙台藩伊達家における「お毒見」役の服毒死事件に端を発する「お家騒動」を描いた人気小説。しかし、今ドキー国の大統領の「毒殺」が真正面から問題になることはありえないから、「お毒見」役なるものは存在しない。しかし、食事が人間の健康の源であることを考えると、大統領の食事のあり方は個人的な問題であると同時に国家の一大事。人は誰でも年をとってくると身体の調子が悪くなっていくもの。まして大統領の激務を毎日こなしていれば、あちこちに無理が出てくるものだ。しかし、本作後半はミッテラン大統領の健康問題が発生したため、オルタンスが提供する料理にも医学的観点からさまざまな制約がかかってくることになる。私だって昼食はどんぶりいっぱい野菜サラダをメインにしているくらいだから、大統領の健康を考えるとおいしいものばかり、お好みのものばかり提供するわけにいかないのは当然だ。

そんな視点から本作を観ていると、ある日ふらりとオルタンスの厨房に一人で入ってきたミッテラン大統領に対して、オルタンスはトリュフ風味のバターをたっぷり塗ったパンに、厚切りトリュフを敷きつめたものを赤ワインと共に提供したが、食事療法をしている大統領に対してそんな高カロリーの料理を提供して大丈夫？そこで大統領からオルタンスにかけられた「いじめられてるね・・・私もだ」という言葉には何ともいえない重みがあるうえ、ミッテラン大統領の人柄がよくわかる。それはともかく、そこでオルタンスが述べたのは「食べたいものはしっかり食べなくちゃ」という意味の言葉だ。これをどう解釈し、その適否をどう判断するかは難しいが、人生やっぱり食べたいものを食べなくちゃ・・・。

2013（平

成25）年8月2日記